平成 21 年度　宇都宮大学　卒業論文

不登校の社会学

～子ども教育の選択～

教育学部　学校教育教員養成課程　教科教育コース　社会科教育専攻　4 年

社会学研究室

061108M

嶋林　ゆり

目次

はじめに ―――――――――――――――――――――――――――――― 2

第1章　不登校とは ―――――――――――――――――――――――― 3

第１節　不登校の変遷 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

（1）呼称の変化・定義

（2）各時期における不登校への認識

（3）不登校の推移

第2章　不登校の実態 ―――――――――――――――――――――― 11

第１節　不登校になった原因 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第２節　１日の過ごし方 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

第３節　不登校になった子どもの心理 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

第3章　学校 VS 民間スクール ――――――――――――――――――― 21

第１節　学校のメリット・デメリット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

第２節　フリースクールとは ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

第３節　フリースクールのメリット・デメリット ・・・・・・・・・・・・・・・ 27

第４節　大人たちの対応 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

第５節　子どもたちのその後 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

おわりに ―――――――――――――――――――――――――――――― 35

参考文献 ―――――――――――――――――――――――――――――― 36

はじめに

昔からの教育問題として、登校拒否がある。今では名前が代わり、不登校と呼ばれるようになった。不登校になる原因は、一般には自分自身によるもの・家庭生活によるもの・学校生活によるものと3つのカテゴリに分けられていて、多くの大人たちはその中から原因を探ろうとする。私も、自分が中学・高校の時、まわりに不登校の子がいて、その原因について「～だからではないか？」と勝手に考えていた。しかし、不登校についての様々な文献を読み進めていくうちに、3 つのカテゴリのどれにもあてはまらない人がいて、その原因もはっきりしていない人が不登校になっていることがわかった。

また、子どもが不登校になった時、大概の人は学校に登校してもらうようにいろんな手立てを考える。私も来年から教師として働いていくが、もし自分が受け持つクラスに不登校の子どもがいたら、どうしたら学校に登校してくれるだろうか、と考えていたと思う。

多くの大人たちは、不登校の子どもを学校に戻すことを考えるのである。それが、後々のこどものため、と思うからだ。しかし、そのような考え方を覆す考えを持つ人に出会った。NPO 団体東京シューレ理事長の奥地圭子さんである。この方は、22 年間公立小学校の教師を続け、その後教師を退き 1985 年東京にフリースクールを開設した。この方が教師をしている時に、自分の子どもが不登校になってしまった。その時に奥地さんは、子どものことを第一に考えることと現代学校教育の歪みに気付いたという。それからは、無理に子どもを学校に登校させるのではなく、子どもが自分に今何が必要なのかを考えさせた。そして、子どもが自分の居場所を感じられるようにしたのである。

不登校の子どもがいる時、大人はどのようにその子に接していけばよいか、私はこの問題を追求していく。学校に登校させるのが目標か。それとも、学校には行かずに家庭やフリースクールで教育を受け、社会人となり生きていくか。それぞれの子どもによってその時の生き方は異なるだろう。それに加え、不登校の子どもの心理や現状を調べ、子どもへの理解をこの論文をとおして深め、来年からの教師生活に役立てていけたらよい。

第1章　不登校とは

不登校はいったいいつ頃から認識されはじめたのか。昔から今と同じような心理的・情緒的な面から不登校になったということが多かったのだろうか。第 1 節では、不登校の変遷として、医学的な側面からもみていくとする。

次に、不登校児とはいったいどのような子を指すのか。学校に出席はしているものの時々休みがちな子・原因不明の腹痛により学校を欠席する子・教室には入らず、保健室に登校する子・・・と様々な子どもがいる。このような子どもたちはみな不登校児扱いになるのであろうか。

そして、第 2 節では、年ごとによる不登校児の増減や学年別にみた数の推移を文部省の統計白書をもとに調査していく。

第 1 節　不登校の変遷

(1) 呼称の変化

不登校という言葉が出来上がった背景に、1950年代半ばに児童精神科によって問題化されはじめたことがある。その当時は、「学校恐怖症」と呼ばれていたが、その後不登校研究の主たる担い手となってきた心理学・精神医学の分野では、臨床的な関連用語として、怠学(truancy)、神経症的登校拒否(neurotic school refusal)、登校拒否症(school refusal syndrome)などが使用されてきた[佐藤:1996]。

日本では、「登校拒否」(school refusal)の語が一般に使用されてきたが、1990年代初めを境に「不登校」が使われ始め、文部省は1998年、学校基本調査における欠席理由の項目にそれまでの「学校ぎらい」に替えて「不登校」の語を公式に用いるようになった。「登校拒否」と「不登校」の内容は同じで、呼び名が変わっただけである[貴戸:2004]。

(2) 不登校の定義

文部省では、登校拒否・不登校の定義を「客観的に妥当な理由を見いだされないまま、主として何らかの心理的・情緒的な原因によって児童生徒が登校しない、あるいは、登校したくてもできない状態にあること(ただし、病気や経済的理由によるものを除く)」としている。児童生徒について、不登校状態であるか否かは、小学校又は中学校における不登校児童生徒に関する文部科学省の調査で示された年間30日以上の欠席という定義も一つの参考となり得ると考えられるが、その判断は各学校やその設置者等が行うこととし、これらの者の判断により、例えば、断続的な不登校や不登校の傾向が見られる児童生徒も対象となり得るものとなる。

さらに以前を振り返ると、義務教育が始まった 1872 年当時から不登校はあった。しかし、その原因というのは現在と異なり、経済的に困難であったから、というものがほとんどである。学費は無償ではなく、その当時からみるとかなり高く、裕福な家庭しか学校には行けなかった。学校に行けなかった子どもは、親の仕事を手伝ったり、丁稚奉行に行かされたりした。そのような子どもは珍しいわけではなかったのである。今生きているお年寄りの中でも、学校を出ずに農業や漁業に従事している人がいる[ねたろー 1998]。

そして本節の冒頭に述べたように、1950 年代に児童精神科によって「不登校」が問題化されはじめ、広く受け入れられるようになった。その後の論争では、日本社会の子ども観や家族観に始まって、社会観や歴史観までに至る広範な議論が巻き起こるようになった。

なお、この論文では、不登校の定義を文部省の登校拒否・不登校の定義にそって「客観的に妥当な理由を見いだされないまま、主として何らかの心理的・情緒的な原因によって児童生徒が登校しない、あるいは、登校したくてもできない状態にあること(ただし、病気や経済的理由によるものを除く)」にしていく。この文部省の定義では、「客観的に妥当な理由を見出せない」と述べているが、不登校にはいじめや家庭環境の原因など明らかな理由もある。そのことも考慮に入れて、以下論じていくとする。

(3) 各時期における不登校への認識

次に、各時期における文科省の認識と対応をみていく。

【～1980 年代】

不登校が取り上げられるようになった 1950 年代から 1980 年代までは「不登校は病理・逸脱」とみなされ、「治療」や「矯正」をほどこすものだとされていた。そのため、当時の臨床現場では、次の論が主流であった。

登校拒否は様々な原因や背景が複雑に絡み合って起こるものである。一般的には、生徒本人の登校拒否を起こしやすい性格傾向からで、それが何らかのきっかけによって登校拒否の状態を招くものと考えられている。

本人の性格傾向: 不安傾向が強い、優柔不断である、適応性に欠ける、柔軟性に乏しい、社会 的、情緒的に未熟である、神経質な傾向が強い・・・・・・・。

養育者の性格傾向: 父親の社会性が乏しく、無口で内向的であり、男らしさや積極性に欠け、自信欠如であるといった場合には、子どもの成長過程でモデルとなるべき父親像を子どもに示してやることができず、登校拒否の下地になりやすい。また、子どもに対して専制的であり、仕事中心で、あまり子どもと接触がない場合にも、モデルとしての父親が与えられないことが多い・・・・・・・。

母親が不安傾向を持ち、自信欠如、情緒未成熟、依存的、内気であるといった場合は一般に子どもに対する態度が過保護なものとなりやすい。このような性格傾向とか保護的養育態度の結合は、登校拒否の重要な背景の一つと考えられる[文部省初等中等教育局: 1984]。

このように、1980 年代までは不登校の「原因」を本人と親の「性格傾向」に求めるものであった。

そして、不登校に対する対応は、本人や家庭に働きかけて登校させる「登校強制」が中心だったのである。教師は、無理に子どもを家から引きずり出したり、強引に家庭訪問をしたりしてほとんど子どもの気持ちを考えるようなことはなかった。そのため、不登校対策は「解決」効果は得られず、むしろ不登校者数は 1980 年に 1 万 4 千人であったのが 1989 年には 4 万人に増えてしまった[貴戸 2004]。

それにより 1980 年代後半からは、各地で不登校の子どものための「居場所」や、不登校の子を持つ親の会などが設立され始め、不登校を「病理・逸脱」ではなく「子どもの選択の結果」として積極的に肯定していくことも増えた。この時期では、現場教師のマンパワーに依存する「強制登校」という不登校対策が効果はないということが明らかになった[貴戸 2004]。

【1992～2001 年】

次期の 1990 年 12 月には「登校拒否はどの子どもにも起こりうる」とする中間報告が出て、1992 年 3 月の協力者会議最終報告では以下のように述べられている。

登校拒否は、児童生徒が学校教育を受けることができないというだけでなく、登校拒否に陥った本人自身が学校に行くことができないことについて苦しみ悩んでいるのはもちろんのことである。その家庭も進学等をめぐる将来への不安感はもとより、子どもが学校へ行かない・行けないことについて罪悪感を抱いたり、自分たちの育て方に問題があったのではないかと悩んだり、他の人から子どもや家庭に問題があるとみられているのではないかと考えたりするなど、精神的にも非常に大きな圧迫感を抱くことが多い。

このような登校拒否問題については、これまでは一般的に、登校拒否となった児童本人の性格傾向などに何らかの問題があるために登校拒否になるケースが多いと考えられがちであった。しかし、登校拒否となった児童生徒をみてみると、必ずしも本人自身の属性的要因が決め手となっているとは言えない事例も、ごく普通の子どもであり属性的には特に何等問題もみられないケースも数多く報告されている [文部省中等教育局 学校不適応対策調査研究協力者会議 1992]。

この時期は、「不登校になりやすい性格傾向」説が否定され、代わって原因を「学校」「家庭」「社会全体」にあるものとされた。対応は、無理な登校強制ではなく、「見守る」姿勢で取り組むことや早期発見・早期対応を目指し、予防策を講じることなどが注目された。この頃から不登校者を「適応」と「指導」の対象とみなす「適応指導教室」の整備、「学校への復帰を前提とし、かつ、登校拒否児

童生徒の自立を助けるうえで有効・適切であると判断される場合」のみ許可された学校以外の施設に通った際の「出席扱い」などが同時に提言された。この「見守る」という姿勢は、学校や行政による不登校者へのコミットメント放棄にもつながり、一部の方からは「学校はいっさい責任を取らなくなった」と言われた[貴戸　2004]。

【2002年～今現在】

1992 年の報告から 10 年の間に不登校者数は増え続け、2001 年度の不登校者数は過去最高の 13 万 9 千人にものぼった。それからは、不登校者の数は年々減少している。「不登校者のその後」での全国的な調査では、不登校を経験した若者の進学・就職ともにしていない率が、一般的な同世代に比べて高いことが明らかになった。また、この時期の協力者会議では、「見守るばかりではなく、関わる姿勢が必要」という対応を示した。そして、「進路」についても強調され、適応指導教室の充実や訪問型の支援の推進、スクールカウンセラーとの連携、公的施設と民間施設の協力などが挙げられた。この時期は、「進路」の問題としての不登校という認識であったので、「社会的自立」の推進が最優先される目標となった[貴戸　2004]。

(3) 不登校の推移

次に、文部省の「平成 20 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」から年度ごとによる不登校児童生徒の推移をみていく。

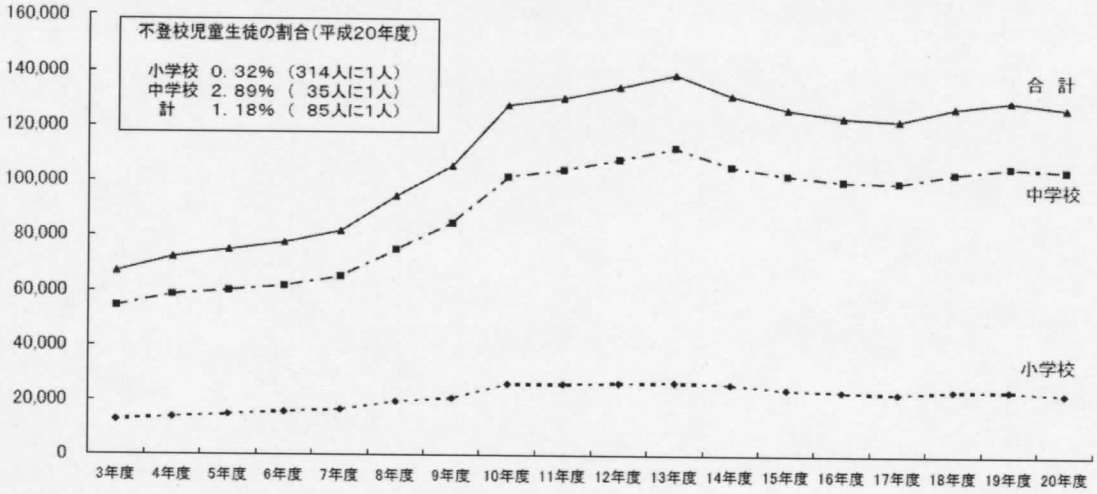
1　小・中学校における不登校児童生徒の状況【速報値】

（1－1）　不登校児童生徒数（30日以上欠席者）

区分	小学校			中学校			計		
	(A) 全児童数（人）	(B) 不登校児童数（人） カッコ内 (B/A×100) (%)	不登校児童数の増▲減率（%）	(A) 全生徒数（人）	(B) 不登校生徒数（人） カッコ内 (B/A×100) (%)	不登校児童数の増▲減率（%）	(A) 全児童生徒数（人）	(B)不登校児童生徒数の合計（人） カッコ内 (B/A×100) (%)	不登校児童生徒数の増▲減率 (%)
3年度	9,157,429	12,645 (0.14)	－	5,188,314	54,172 (1.04)	－	14,345,743	66,817 (0.47)	－
4年度	8,947,226	13,710 (0.15)	8.4	5,036,840	58,421 (1.16)	7.8	13,984,066	72,131 (0.52)	8.0
5年度	8,768,881	14,769 (0.17)	7.7	4,850,137	60,039 (1.24)	2.8	13,619,018	74,808 (0.55)	3.7
6年度	8,582,871	15,786 (0.18)	6.9	4,681,166	61,663 (1.32)	2.7	13,264,037	77,449 (0.58)	3.5
7年度	8,370,246	16,569 (0.20)	5.0	4,570,390	65,022 (1.42)	5.4	12,940,636	81,591 (0.63)	5.3
8年度	8,105,629	19,498 (0.24)	17.7	4,527,400	74,853 (1.65)	15.1	12,633,029	94,351 (0.75)	15.6
9年度	7,855,387	20,765 (0.26)	6.5	4,481,480	84,701 (1.89)	13.2	12,336,867	105,466 (0.85)	11.8
10年度	7,663,533	26,017 (0.34)	25.3	4,380,604	101,675 (2.32)	20.0	12,044,137	127,692 (1.06)	21.1
11年度	7,500,317	26,047 (0.35)	0.1	4,243,762	104,180 (2.45)	2.5	11,744,079	130,227 (1.11)	2.0
12年度	7,366,079	26,373 (0.36)	1.3	4,103,717	107,913 (2.63)	3.6	11,469,796	134,286 (1.17)	3.1
13年度	7,296,920	26,511 (0.36)	0.5	3,991,911	112,211 (2.81)	4.0	11,288,831	138,722 (1.23)	3.3
14年度	7,239,327	25,869 (0.36)	−2.4	3,862,849	105,383 (2.73)	−6.1	11,102,176	131,252 (1.18)	−5.4
15年度	7,226,910	24,077 (0.33)	−6.9	3,748,319	102,149 (2.73)	−3.1	10,975,229	126,226 (1.15)	−3.8
16年度	7,200,933	23,318 (0.32)	−3.2	3,663,513	100,040 (2.73)	−2.1	10,864,446	123,358 (1.14)	−2.3
17年度	7,197,458	22,709 (0.32)	−2.6	3,626,415	99,578 (2.75)	−0.5	10,823,873	122,287 (1.13)	−0.9
18年度	7,187,417	23,825 (0.33)	4.9	3,609,306	103,069 (2.86)	3.5	10,796,723	126,894 (1.18)	3.8
19年度	7,132,874	23,927 (0.34)	0.4	3,624,113	105,328 (2.91)	2.2	10,756,987	129,255 (1.20)	1.9
20年度	7,121,781	22,652 (0.32)	−5.3	3,603,220	104,153 (2.89)	−1.1	10,725,001	126,805 (1.18)	−1.9

(注)調査対象:国公私立小・中学校(中学校には中等教育学校前期課程を含む)。以下同じ。

不登校児童生徒数の推移



（文部省のホームページより抜粋）

統計は、平成 3 年度より実施されている。まずは、小学校からみていく。小学校は、平成 3 年度から13 年度までなだらかに不登校児童の数が増えていっている。平成 14 年度の不登校児童の全児童数に対する割合は、0, 36%である。不登校児童数の増減率は平成 10 年度がピークで、25, 3%である。それ以降は、少し増えては減っての繰り返しである。

一方、この統計では中学校で、平成 7 年度に急激に不登校の数が増え、19 年度が全児童数に対する不登校生徒の割合が最も多くなっている。増減率は平成 10 年度で 20, 0%、それ以降は小学校と同様減ったり増えたりしている。

小学校中学校どちらにも言える事は、平成 10 年度から 20 年度までは、以前ほど不登校児童数の急激な変化はなく、ほぼ同じような水準をたどっているということだ。私としては、昨今の教育問題として不登校がよく挙げられているので、きっと昔より数が急増しているのではないか、と予想していた。しかし、実際の統計をみてみると、私の予想が覆される結果となった。

以前よりも不登校の数が減っているのは、総人口が減少していることもあるからだと報告されている。また、他の考えとして、文部省はその減少の理由について、①スクールカウンセラーの配置②週休 5 日制③対策強化の成果の3つの答えを出している。

不登校の数が減少していることはいいことだが、はたして文部省のように不登校問題が解決され始めてきた、と簡単に考えてよいのだろうか。私は、不登校問題が解決され始めている、と考えるのはまだ早いように感じる。その理由を3つの文部省の答えに反論して以下に示していくことにする。

①スクールカウンセラー配置

スクールカウンセラーは原則週2日来校である。スクールカウンセラーに会いに来れば出席になるが、それだけでは週2日の登校。スクールカウンセラーが入ることによって学校内の体制が大きく改善されて登校しやすくなった、というのは成果と言える。しかしこれは一般的には、教室へのフルタイム登校ではなく、短時間の相談室登校、別室登校がほとんどと考えられる。「居場所」ができても、それは教室外であることがほとんどである。スクールカウンセラーによる学校改革は、力のある熟練した人でないと難しい。まだまだ学校全体が変わったとは言えない。

②週休5日制

隔週5日制から週休5日制になって年間で約 20 日登校日が減った。概略年間で 220 日中 190 日出席が必要だったのが、200 日中 170 日出席必要に減ったのである。負担は減ったので、たしかに 30 日以上欠席者が減る可能性は十分ある。

③対策強化の成果

人数が減ったとしても、数さえ減ればいい、でもいけない。問題は実態である。最近、数が毎年史上最高、と騒ぎすぎていたと思われる。数が増えては学校、行政への批判が強まったのは、数減らしをせざるをえなくもなる。数だけでさわいで、質については触れられてない点が私はずっと気になっている。不登校にカウントされていない人の中に、悩み苦しみをかかえて登校している人、別室登校・短時間登校がどの位いて、どのようになっているのかが重要である。

不登校の減少は、「ふえどまり」、学校による、「かかえこみ、囲いこみ」であり、登校のはたらきかけの強化である。スクールカウンセラーも不登校者数減少の成果を期待されて子と学校の間で板ばさみに合ってもいる。 保健室、第二保健室、別室、相談室、個室、美術室、校長室などの登校、30 分登校、母子登校、校門登校、玄関登校、夜間登校などが学校から働きかけられる。これらは、数年前までは、親が希望しても、できない、とはねのけられていたことである。また、服装違反、茶髪も以前は校門で追い返していた例が多い。今は入れるが、一室に隔離したりして、これも登校の増加につながっているであろう。

こうしたことが、対策強化、受け入れの多様化、居場所作りということになるのではないだろうか。つまり、不登校が減少したのではなく、不登校が見えにくくなった、表面に表れない不登校がふえた、不登校がより深刻化していくといったほうがよいのではないだろうか。

続いて、学年別の推移をみていく。小学校１年生から中学校３年生までにおける不登校者数についてである。

（１－３） 学年別不登校児童生徒数

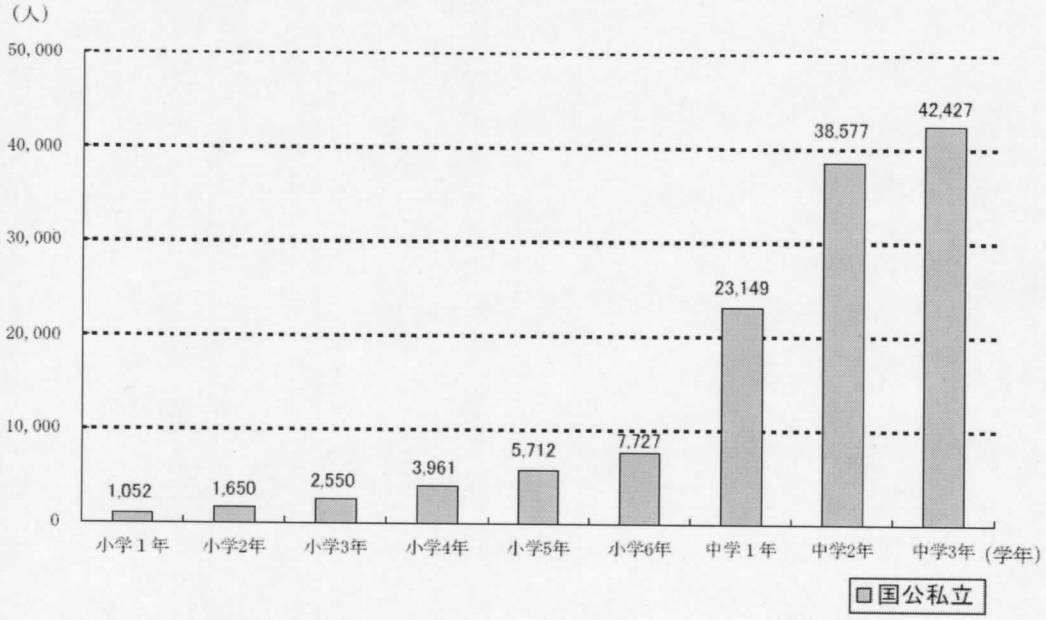
小学校 （人）

区分	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
国立	0	1	6	7	17	24	55
（男子）	0	1	3	2	9	13	28
（女子）	0	0	3	5	8	11	27
公立	1,047	1,644	2,539	3,942	5,673	7,661	22,506
（男子）	587	871	1,371	2,097	2,941	3,710	11,577
（女子）	460	773	1,168	1,845	2,732	3,951	10,929
私立	5	5	5	12	22	42	91
（男子）	2	2	1	7	8	14	34
（女子）	3	3	4	5	14	28	57
計	1,052	1,650	2,550	3,961	5,712	7,727	22,652
（男子）	589	874	1,375	2,106	2,958	3,737	11,639
（女子）	463	776	1,175	1,855	2,754	3,990	11,013

中学校（人）

区分	1年	2年	3年	計
国立	73	129	119	321
（男子）	36	64	76	176
（女子）	37	65	43	145
公立	22,412	37,303	41,088	100,803
（男子）	11,335	18,401	20,244	49,980
（女子）	11,077	18,902	20,844	50,823
私立	664	1,145	1,220	3,029
（男子）	290	490	523	1,303
（女子）	374	655	697	1,726
計	23,149	38,577	42,427	104,153
（男子）	11,661	18,955	20,843	51,459
（女子）	11,488	19,622	21,584	52,694

学年別不登校児童生徒数のグラフ



だんだん大人になるにつれて、不登校の数も増えていっている。この増えていっている原因の一つは、不登校だった子がそのまま大人になっていくからだ。

特に、小学 6 年と中学 1 年の数に大きな開きが出ている。これは、小学校と中学校のギャップに驚く“中 1 ギャップ”もあるだろう。勉強も急に難しく感じ、部活動で忙しくなり、先輩・後輩の関係に苦しむことがある。

中学校の不登校は、小学校のものより圧倒的に多い。それに、中学 3 年の不登校の数は、中学 1 年のおよそ 2 倍にもなる。

第 2 章　不登校の実態

第1章では、不登校の児童生徒数の増減の統計をみてきた。 不登校になった子どもたちは、どのように 1 日を過ごし、どんなことを日々考えているのだろうか。

第 2 章では、不登校の実態について明らかにしていく。

第 1 節　不登校になった原因

不登校になった原因は人それぞれである。第 1 節では、参考文献の資料をもとにどのような過程で不登校になったのかを事例や統計をとおして把握していく。
最初に、一般的に考えられている3つのタイプに分けてみる。

一般的な3つのタイプ

（ｉ）学校生活に関すること
（ii）家庭生活に関すること
（iii）自分自身に関すること

次ページ(13,14 ページ)に、文部省のホームページより抜粋した不登校になったきっかけと考えられる状況・不登校状態が継続している又は継続していた理由を載せた。その統計より、具体的な不登校の現状を知ることにする。

最初に、不登校になったきっかけと考えられる状況からみていく。小学校・中学校どちらも 1 番多かったのが、「その他本人に関わる問題」である。全体の約 4 割を占めている。小学校では、次が「親子関係をめぐる問題」「いじめを除く友人関係をめぐる問題」と続く。中学校は、「いじめを除く友人関係」が次に多く、「学業の不振」「親子関係をめぐる問題」と続く。

「その他本人に関わる問題」は、学校生活に関して無気力であったり、自身の身体の悩みだったり、と人様々な問題である。「いじめを除く友人関係」は、いじめを受けている訳ではないが、うまく人間関係を築くことができず、孤独感を味わったりして学校に行くのが億劫になる、というものだ。「親子関係をめぐる問題」は、親子間のコミュニケーションがうまくとれない、両親から愛情を注いでもらっている、ということを感じることができず、自分の殻に閉じこもり学校に行けなくなる・・・などである。

中学校において、割合が高かった「学業の不振」は、小学校までの学習はまだ理解することができたが、英語や数学が急に難しくなった、と感じる子どもが多いことが推測される。

不登校状態が継続している又は継続していた理由は、小学校では「不安など情緒的混乱」「無気力」「その他」の順で、それに加えて中学校は、「いじめを除く他の生徒との関係」「あそび・非行」が多くなっている。

一度不登校になると、しだいに学校に行きづらくなる。学校に登校したときにまわりの人達と上手くなじめるか、という不安が大きい。「無気力」は、何にも打ち込めることがなく、ただぼんやりと日々を過ごす。中学校の「あそび・非行」は、夜遊びや喫煙・飲酒などに興味を持ち、学校外で活動し始め、学校に登校しなくなることがあるようだ。

（1－4） 不登校となったきっかけと考えられる状況

区分	小学校				中学校				計			
	国立	公立	私立	計	国立	公立	私立	計	国立	公立	私立	計
いじめ	4 人	491 人	3 人	498 人	7 人	3,103 人	77 人	3,187 人	11 人	3,594 人	80 人	3,685 人
	7.3 %	2.2 %	3.3 %	2.2 %	2.2 %	3.1 %	2.5 %	3.1 %	2.9 %	2.9 %	2.6 %	2.9 %
いじめを除く友人関係をめぐる問題	9 人	2,727 人	11 人	2,747 人	52 人	20,119 人	521 人	20,692 人	61 人	22,846 人	532 人	23,439 人
	16.4 %	12.1 %	12.1 %	12.1 %	16.2 %	20.0 %	17.2 %	19.9 %	16.2 %	18.5 %	17.1 %	18.5 %
教職員との関係をめぐる問題	5 人	642 人	7 人	654 人	3 人	1,533 人	47 人	1,583 人	8 人	2,175 人	54 人	2,237 人
	9.1 %	2.9 %	7.7 %	2.9 %	0.9 %	1.5 %	1.6 %	1.5 %	2.1 %	1.8 %	1.7 %	1.8 %
学業の不振	6 人	1,460 人	4 人	1,470 人	27 人	11,051 人	313 人	11,391 人	33 人	12,511 人	317 人	12,861 人
	10.9 %	6.5 %	4.4 %	6.5 %	8.4 %	11.0 %	10.3 %	10.9 %	8.8 %	10.1 %	10.2 %	10.1 %
クラブ活動，部活動等への不適応	0 人	56 人	3 人	59 人	4 人	2,587 人	64 人	2,655 人	4 人	2,643 人	67 人	2,714 人
	0.0 %	0.2 %	3.3 %	0.3 %	1.2 %	2.6 %	2.1 %	2.5 %	1.1 %	2.1 %	2.1 %	2.1 %
学校のきまり等をめぐる問題	0 人	179 人	0 人	179 人	4 人	4,580 人	58 人	4,642 人	4 人	4,759 人	58 人	4,821 人
	0.0 %	0.8 %	0.0 %	0.8 %	1.2 %	4.5 %	1.9 %	4.5 %	1.1 %	3.9 %	1.9 %	3.8 %
入学，転編入学，進級時の不適応	2 人	756 人	0 人	758 人	18 人	3,898 人	197 人	4,113 人	20 人	4,654 人	197 人	4,871 人
	3.6 %	3.4 %	0.0 %	3.3 %	5.6 %	3.9 %	6.5 %	3.9 %	5.3 %	3.8 %	6.3 %	3.8 %
家庭の生活環境の急激な変化	6 人	2,310 人	12 人	2,328 人	20 人	5,383 人	93 人	5,496 人	26 人	7,693 人	105 人	7,824 人
	10.9 %	10.3 %	13.2 %	10.3 %	6.2 %	5.3 %	3.1 %	5.3 %	6.9 %	6.2 %	3.4 %	6.2 %
親子関係をめぐる問題	9 人	4,234 人	20 人	4,263 人	46 人	9,449 人	306 人	9,801 人	55 人	13,683 人	326 人	14,064 人
	16.4 %	18.8 %	22.0 %	18.8 %	14.3 %	9.4 %	10.1 %	9.4 %	14.6 %	11.1 %	10.4 %	11.1 %
家庭内の不和	3 人	1,361 人	5 人	1,369 人	17 人	4,452 人	142 人	4,611 人	20 人	5,813 人	147 人	5,980 人
	5.5 %	6.0 %	5.5 %	6.0 %	5.3 %	4.4 %	4.7 %	4.4 %	5.3 %	4.7 %	4.7 %	4.7 %
病気による欠席	1 人	1,994 人	15 人	2,010 人	13 人	6,863 人	363 人	7,239 人	14 人	8,857 人	378 人	9,249 人
	1.8 %	8.9 %	16.5 %	8.9 %	4.0 %	6.8 %	12.0 %	7.0 %	3.7 %	7.2 %	12.1 %	7.3 %
その他本人に関わる問題	15 人	9,490 人	35 人	9,540 人	154 人	41,561 人	968 人	42,683 人	169 人	51,051 人	1,003 人	52,223 人
	27.3 %	42.2 %	38.5 %	42.1 %	48.0 %	41.2 %	32.0 %	41.0 %	44.9 %	41.4 %	32.1 %	41.2 %
その他	4 人	2,593 人	10 人	2,607 人	7 人	4,579 人	135 人	4,721 人	11 人	7,172 人	145 人	7,328 人
	7.3 %	11.5 %	11.0 %	11.5 %	2.2 %	4.5 %	4.5 %	4.5 %	2.9 %	5.8 %	4.6 %	5.8 %
不明	4 人	1,022 人	3 人	1,029 人	6 人	3,647 人	192 人	3,845 人	10 人	4,669 人	195 人	4,874 人
	7.3 %	4.5 %	3.3 %	4.5 %	1.9 %	3.6 %	6.3 %	3.7 %	2.7 %	3.8 %	6.3 %	3.8 %

（注1） 複数回答可とする
（注2） パーセンテージは、各区分における不登校児童生徒数に対する割合

（1－5） 不登校状態が継続している又は継続していた理由

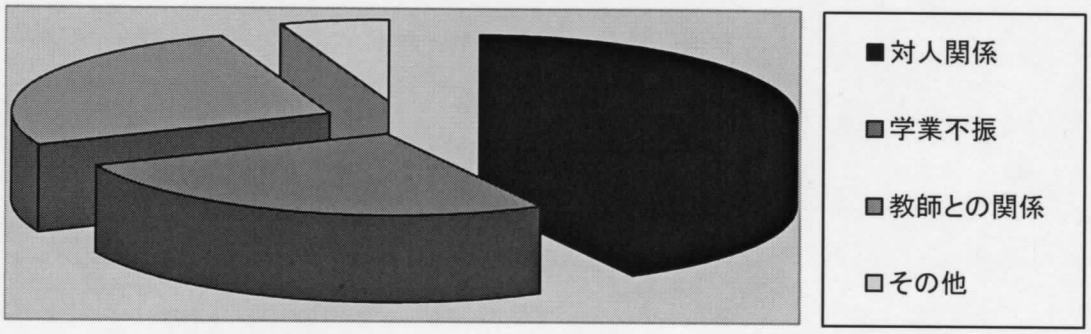
区　分	小学校				中学校				計			
	国立	公立	私立	計	国立	公立	私立	計	国立	公立	私立	計
いじめ	3 人	185 人	2 人	190 人	6 人	989 人	33 人	1,028 人	9 人	1,174 人	35 人	1,218 人
	5.5 %	0.8 %	2.2 %	0.8 %	1.9 %	1.0 %	1.1 %	1.0 %	2.4 %	1.0 %	1.1 %	1.0 %
いじめを除く他の児童生徒との関係	8 人	2,064 人	10 人	2,082 人	55 人	14,459 人	411 人	14,925 人	63 人	16,523 人	421 人	17,007 人
	14.5 %	9.2 %	11.0 %	9.2 %	17.1 %	14.3 %	13.6 %	14.3 %	16.8 %	13.4 %	13.5 %	13.4 %
教職員との関係	4 人	375 人	6 人	385 人	3 人	696 人	29 人	728 人	7 人	1,071 人	35 人	1,113 人
	7.3 %	1.7 %	6.6 %	1.7 %	0.9 %	0.7 %	1.0 %	0.7 %	1.9 %	0.9 %	1.1 %	0.9 %
その他の学校生活上の影響	5 人	1,231 人	2 人	1,238 人	32 人	7,419 人	262 人	7,713 人	37 人	8,650 人	264 人	8,951 人
	9.1 %	5.5 %	2.2 %	5.5 %	10.0 %	7.4 %	8.6 %	7.4 %	9.8 %	7.0 %	8.5 %	7.1 %
あそび・非行	0 人	222 人	0 人	222 人	9 人	12,352 人	41 人	12,402 人	9 人	12,574 人	41 人	12,624 人
	0.0 %	1.0 %	0.0 %	1.0 %	2.8 %	12.3 %	1.4 %	11.9 %	2.4 %	10.2 %	1.3 %	10.0 %
無気力	5 人	6,447 人	7 人	6,459 人	75 人	29,949 人	420 人	30,444 人	80 人	36,396 人	427 人	36,903 人
	9.1 %	28.6 %	7.7 %	28.5 %	23.4 %	29.7 %	13.9 %	29.2 %	21.3 %	29.5 %	13.7 %	29.1 %
不安など情緒的混乱	25 人	9,688 人	49 人	9,762 人	136 人	33,004 人	1,513 人	34,653 人	161 人	42,692 人	1,562 人	44,415 人
	45.5 %	43.0 %	53.8 %	43.1 %	42.4 %	32.7 %	50.0 %	33.3 %	42.8 %	34.6 %	50.1 %	35.0 %
意図的な拒否	1 人	1,469 人	5 人	1,475 人	13 人	6,864 人	149 人	7,026 人	14 人	8,333 人	154 人	8,501 人
	1.8 %	6.5 %	5.5 %	6.5 %	4.0 %	6.8 %	4.9 %	6.7 %	3.7 %	6.8 %	4.9 %	6.7 %
その他	14 人	4,685 人	28 人	4,727 人	42 人	9,964 人	475 人	10,481 人	56 人	14,649 人	503 人	15,208 人
	25.5 %	20.8 %	30.8 %	20.9 %	13.1 %	9.9 %	15.7 %	10.1 %	14.9 %	11.9 %	16.1 %	12.0 %

（注1） 複数回答可とする
（注2） パーセンテージは、各区分における不登校児童生徒数に対する割合

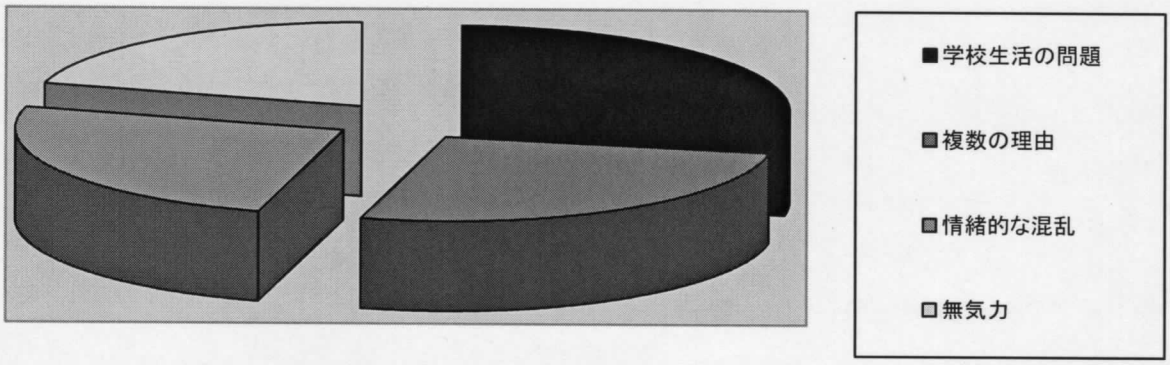
（文部省ホームページより抜粋）

文部省の統計とは別になるが、森田洋司の『不登校-その後-』(2003 年)では、さらに大きく4つのタイプに分類して、小学校・中学校合わせての不登校のきっかけと考えられる状況においての割合と継続していた理由の割合が示されていたので、それを以下に示すことにする。

＜不登校のきっかけ＞



＜不登校の継続理由＞



学校生活では、小学校は気の合う友達ができずに学校に行けなかったという意見が多かった。中学校になると、勉強についていけないから、勉強と部活の両立に疲れたから、また、先輩後輩の関係が嫌だったからというものが多かった。勉強についていけない理由は、小学校に比べ数学や英語の内容が急に難しく感じられるようになったという意見が多い。勉強と部活の両立については、小学校までは家に帰れば友達と遊んだり、テレビを観たり、と自由な時間を過ごせたが、中学校になるとほぼ毎日が部活で、家に帰ればくたくたで宿題をしなければいけない・・・というような日々になる。先輩後輩の関係は、何か後輩が目立つような格好や行動をしたら、先輩に目をつけられていじめを受ける、というようなことがある。

家庭生活においては、両親から十分な愛情を注いでもらえなかった、両親の不仲など親との関係性の悪化が目立った。

自分自身によるものは、自分の体型や容姿へのコンプレックス、思春期特有の悩み、学校以外のものに興味を持ち始める、というものが多かった。

不登校のきっかけについては、文科省の統計では親子関係の問題の割合が多かったが、この統計では対人関係の中に含まれていた。対人関係には、学校・家庭の両方が含まれる。

不登校の継続理由においては、文部省と森田氏の調査がほとんど同じような結果となっている。

第2節　1日の過ごし方

第1節では、様々な事例を抽象的に拾い集め、簡単にまとめた。本節では、具体的な事例を取り上げる。事例は、2006 年に出版された貴戸理恵の『不登校は終わらない』から引用することにする。

不登校になった原因を分類して、きっかけから不登校になるまでの事例を4つ抽出し、分析する。なお、AさんとBさんはフリースクールを経験している事例であり、C・D・Eさんはフリースクールに通わず、自宅で過ごした事例である。なぜこの分類にしたかというと、不登校になった後の行動は、どこかに自分の居場所を求めるか求めないかになるだろう、と考えたからだ。

5 人それぞれをタイプ別に分けて、どのようなタイプか自分で考えて分析していくことにする。

事例

（Aさん、25歳女性） フリースクール→就職 タイプ

中学 1 年の 2 月に学校をやめた。原因は「ちょっといじめを受けて」いたこと、先生が「えこひいき」する人などにより、「学校が怖くなった。しだいに学校・制服・チャイムもだめになった。」親は比較的不登校には理解があったが、学校に行かなくなってからは、「部屋に閉じこもってバリケードを張ったり、自殺しようと思って、実行してみたり」した。そして、1 年後知り合いのおばさんにフリースクールのことを教えてもらい、見学に行き、入会した。

このフリースクールに出会わなければ、「学校に行く道しか知らなかった。這ってでも、胃に穴開けてでも行くしかなかった。」15 歳の時には、スクールに通うかたわら、コンビニエンスストアでアルバイトをはじめた。それからはずっと何らかの職場で働く。

フリースクール時代は、「学校外の道は特別だと思っていた」が、現在は不登校のことは「隠すことでもないし、言いふらすことでもない」「学校に行ったか行かなかったかは関係ない」と考えている。職場では、学校の話題になれば普通に不登校の話をするし、むしろ不登校であったことを忘れているくらいだという。今の職場は、工場であるが、そこで「仕事の出来」が学歴に関係しないことに気付いた。多くの求人広告で「高卒以上」と書いてあるが、疑問である。

「引きこもっているときは、それが自分の中で安心できる状態であるのならそれでいい。それを大人が無理に引っ張り出すのは違う。そのタイミングは本人しか分からないのだから。もっとも否定的にみるのは、大学出て仕事も何もしないで、プー太郎やっている人。就職難と言われているけど、コンビニのバイトで何がいけないの？」

A さんは、最終的に仕事はして、自立するべきだと考えている。働くことができるにもかかわらず、プレッシャーやプライドによって働かないことは、悪いことであるという。今は、かつての職場で知り合った人との「結婚資金」をためるため、長時間の労働も苦にはなっていない。

（Bさん、25歳女性） フリースクール→通信制短大→就職 タイプ

小学 4 年生の時に学校に行かなくなり、15 歳までの 5 年間を家で過ごす。学校に行かなくなったきっかけは、分からない。親は無理やり学校に行かせることはしなかった。昼夜逆転で閉じこもる生活はつらく、不登校の自己に対する評価は低かった。中学卒業まで家で 1 日を生活していたが、「これからはこのままではいけない」と思い、フリースクール東京シューレに通い始めた。

「シューレに行ったら、不登校でも元気な人たちがいっぱいいて、奥地さんも不登校だっていいのだ、って言ってくれて、肯定された！という感じだった」

その後、高校には行かず、高卒資格と保育士資格の取れる通信制の短大に進み、今は保育士として働いている。ずっと東京シューレの不登校思想に浸ってきたため、職場という場になじむのが大変だった。D さんにとって職場の人たちは、「何か合わないものを感じる、いじめられたり険悪だったりするわけじゃないけど、ちゃんと深い話ができない」存在であり、「これなら無難かな、と思って

する話が、みんなにとっては本当の会話だったり」という、異質な相手である。一方で、シューレの人は、「初めて会う人でも、話をすればそうそうって通じる。次からは 2 人でいても平気な感じ」である。不登校者同士の集まりは安心して自分の感情や経験を吐露することができる場である。

今の仕事については、自分が集団で生きてなかったのに、集団でやれるように子どもに言うのはどうなのだろうと疑問に思っている。「葛藤」や「迷い」は、「子ども＝不登校児としての自分」と「大人＝保育士としての自分」を、いずれ消すことなく大切にしていこうとしている。

（Cさん、22 歳男性） ひきこもり→アルバイト→予備校→アルバイト タイプ

家族は、両親・妹の 4 人家族。妹は小学校時代から不登校をしており、母親は地元に不登校を考える親の会を立ち上げた。父親の印象は薄く、母親が不登校運動の担い手だったため、家庭は不登校には受容的であった。小学校時代は通っていたが、家にいる妹をみて「行かなくてずるいな」と感じていた。

学校に行かなくなったのは、中学に入ってから。小学校とは異なり、ぴりぴりと張り詰めた厳しい雰囲気があった。先輩・後輩関係にも戸惑った。小学校の仲のよい友達も中学ではばらばらになり、教室ではいつもひとりぼっちだった。勉強はする気がしなかった。

中学 1 年の夏休み明けから学校に行ったり行かなくなったりした。その後には、学校に行く日の朝は体調が悪くなった。

学校に行かない多くの時間は、家でひとりで過ごした。本を読んだり、ゲームをしたり。思想・哲学系の書物が好きで、ニーチェを読んだ。好きな哲学者はフーゴー。「退屈」「暇」「世間体」もあって、中学 3 年のころから八百屋や生協でアルバイトを始めたが、周りからは浮いている感があった。

その後は大検予備校に通い、大学の哲学科を受験したが、結局入学はしなかった。

学歴社会や学校制度への嫌悪感は特にない。今は、地元の NPO 団体で障害者介助のアルバイトをしている。不登校は特別プラスでもマイナスでもなかった。不登校は、「どうでもよい」と思っている。

（Dさん、25 歳女性） ひきこもり→定時制高校→短大→アルバイト タイプ

長く医療に関わっている。「先生が素敵なの」「パニック障害があってね」と明るく言う一方で、「安定剤の副作用がつらい」「死を考える」と観念したような穏やかさで話す。

三人姉妹の長女で 1 歳下の次女は、小学校高学年のときに不登校になった。次女は、中学校から学校に行き始めたが、入れ替わるように、今度はGさんが学校に行かなくなる。4 歳下の妹はずっと学校に行っていた。

小学校時代のGさんは、「楽しいことばっかりじゃなかったけど、特に悩みもなく、一般的に言われている普通の子どもみたいな感じ」であったという。

不登校になったのが、中学 2 年の後半からだった。そのときは、はっきりした理由やきっかけがあ

ったわけではなく、突然訪れた内面的な変化に戸惑っていただけであった。「もう、すごい、いきなり多感期になったっていう感じなのかな、登校拒否始めてから」

学校に行かなくなってからは、街角のギター弾きのもとに通うようになった。精神科にも通っており、不登校の話をして医者の前で泣いてしまうこともあった。

母親は、次女の不登校時代から親の会に通っており、不登校やフリースクールの情報は比較的豊富であった。東京シューレにも見学に行ったが、そこに馴染むことができず、「自分にはとても通えない」と感じた。

中学校時代の後半をフリースクールやフリースペースに行くことなく家で過ごした。学校はあまり関わってくることがなかった。高校は、定時制に進んだが、その生活は非常に苦痛の大きいものであった。もうそこには、「不登校という選択肢」は存在しなかったのである。

高校卒業後は、短大の国文科に進み、卒業後は時々アルバイトをしながら実家で暮らしている。「あのまま、中学行かなくならないで、通ってたら、どんな人生になってたんだろうなぁ」「登校拒否して人生が狂っちゃった」と言うGさんは、不登校については、「すばらしいとは言い切れないほど、どろどろしたものがある」と感じている。不登校経験は、今も彼女の中に何か言語化しがたいものとして残されている。

(Eさん、20歳男性) 定時性→通信制→専門学校 タイプ

中2の 1 学期終わり頃からはほとんど学校に行かなかった。登校しても授業には出ないで、運動場・廊下などでタバコを吸ったり、他のクラスに出入りしたりしていた。

職員室に行くのが好きで、いろんな先生と話していた。自分がクラスのムードメーカーだと思っていた。自分の調子がよいときは、友達が優しかった。部活は、バレー部・バスケ部・野球部と転々としたが、練習には行かなかった。学校は好きだったが、自分がグレていたので自分次第だと思う。

小学校は毎日学校に行って、勉強も楽しかった。中2から悪い友達と遊ぶことが楽しくなり、だんだんタバコ、シンナー、酒をやるようになった。

不登校中は、グレていたから何も考えてなかったし、面倒くさかった。学校は嫌いじゃなかった。自分の思い通りのことをしていた。気に入らない教師や友達を殴る一方、ムードメーカーだったので、自分次第で友人の対応が違うことも認識していたが、当時は見えていなかった。

家族からは見捨てられていた。母は泣いていて、父は自分を全く無視していた。家で、友達と大騒ぎをして、救急車を呼ぶ大事になった翌朝、父がはじめてやさしく「(自分の経営している)会社にいこうよ」と声をかけてくれた。それからは、いろいろアドバイスをくれ、今では何でも話せるようになった。

フリースクールには面倒くさかったので、通わなかった。病院へとも言われたが、自分がおかしいとは思わなかったので行かなかった。中学卒業後は、1年遅れて、定時制高校に2年通い、3年から通信制、そして専門学校に入学した。

分析

不登校になった原因は、人それぞれであるが、このA～Dさん 4 人は最も大きな問題が友人との関係やいじめによるものが多い。様々な文献を読み進めても、不登校継続理由が、いじめ・対人関係・きまりや学習への不適応・無気力といったものだ。また、その原因は単発なものではなく、いろいろなものが絡み合っているように感じられる。

不登校になりやすい障壁として他の文献では、中学校に入学してからの小学校との変化の差に驚いてしまう、「中１ギャップ」もある、と報告されている。ここの論文では、Bさんの事例がそうである。勉強も難しくなり、部活動も始まる。そして、先輩・後輩の関係性。新しいことが多く始まり、不安と緊張の連続と感じる人も多い。そのような毎日の生活に、疲れて学校が怖い存在になるのであろう。

不登校になる原因は対人関係や学習への不適応がほとんどである。先生・友人・家族・・・・・何か自分と合わないと思えば、学校に行きづらくなる。勉強もわかない、と思えばもう勉強することをあきらめて学校に行きたくない、と思い始める。そしてそれが体調に出始める。主に腹痛や頭痛である。それで、朝に起きられなくなり、不登校の前兆になる。

不登校になったA～Dさんは、学校については、「別に行っていても行かなくてもそんなに問題ではない」と語っているが、心の中では学校に行きたかった、と思っているのではないだろうか。なぜなら、人は何かに所属していないと不安になるものだし、一人で家にいても所在がない。孤独感が１番の苦しみだと考える。不登校の人は、同年代が学校に行っているように自分も学校に本当は行きたいのに、と考えると思う。

子どもは、まだ自分の感情をうまく表現することができないでいることが多いので、大人は子どもの真の感情を理解して、子どもが「今どうしたいのか？」を１番に考えてあげて最善を尽くすようにすることが大切である。

第３節　不登校になった子どもの心理

不登校になった子どもたちは、日々どのようなことを考えているのだろうか。学校のこと、自分自身のこと、これからの未来・・・それぞれ生活の仕方は異なるし、何を考えているかも人それぞれだ。不登校の子どもに関わる周りの人や大人たちはどのような言葉かけや接し方をすればいいのか。森田洋司の『不登校-その後-』より、不登校だった子どもたちのその時の心理を語った部分を抜き出し、自分なりに子どもの心理理解を図っていくことにする。また、分類していくことで、さらに子どもの理解を深めていく。分類としては、（ポジティブ/ネガティブ）の思考に分け、ネガティブの中でも自分自身に対するもの・自分以外に対するものに区別することでより具体的に子どもの心理についてせまっていく。

＜ポジティブ思考＞

- 学校を休んでいても、家では元気で外出もできた。
- 人といることがすごくいやで、一人でいるほうが楽だった。
- 両親が自分の気持ちを聞き入れ、理解し、応援してくれたことがうれしかった。
- 気にかけてくれる友人が、自分の悩みを聞いてくれ、支え、励ましてくれたのがうれしかった。
- 仲の良い友人が遊びに来てくれるのはうれしかった。

＜ネガティブ思考＞

自分自身に対して

- 学校に行かないことへの罪悪感。
- 将来が大変に思えて心配だった。
- 勉強の遅れが気になった。
- 最初の頃は迷いがあったが、学校の中に打ち込めるものがなかった。
- 学校は勉強するところであり、成績が悪く、勉強がわからない自分は行く価値がないと思えた。
- 学校・制服への憧れがあったが、どうしても行けなかった。
- 1 日中暗いことばかり考えて泣いていた。家庭にも学校にも自分の居場所がなく、死ぬことばかり考えていた。

自分以外に対して

- 悩んでいて、街で学生服に出会うと逃げ出したくなり、避けていた。卒業してからもその状態が続き、なかなか立ち直れなかった。18 歳ごろまでわだかまりがあった。
- 無理やり学校に行かされたり、先生が迎えに来たりして、休んでいても気が休まらなかった。
- 朝起きると、気分が行きたくなくなっている。何かにおびえていた。声をかけられると、意地をはって余計に「行くものか」という気になった。
- 放っておかれると、かまってもらいたいと淋しくなる。
- 病院に連れて行かれたり、同級生の親が「あの子とは遊んではだめ。」と言われたりしたのが嫌だった。
- たまに学校へ行くと「何で来たの？」みたいにみられたのは辛かった。
- 友達の誘いが、仲の良い友人というわけでもなく、先生からの指示なので、ただうるさい感じだっ

た。

- 学校の先生が「頭がおかしいので学校へ来ない」と言っているということを聞いてくやしかった。
- 担任がいじめた側の生徒を怖がり、いじめられてもフォローできず、頼りなかった。学校に行ける状態を作ってほしかった。久しぶりに登校しても「来たの？」とわりと関心ない雰囲気で、取り残された気持ちだった。
- 電話で話を聞いてくれる友達がいたが、学校では自分の側についてくれず、卑怯だと思った。かえって傷ついた。
- グレていたから何も考えてなかったし、面倒くさかった。気に入らない教師や友達がいるとカッとなり、殴っていた。

分析

以上から、多くの不登校経験者は自分の不登校についてネガティブにみていることが多いようだ。徹底的に自分を追い込んでしまうネガティブな思考として、将来への心配などがある。

また、自分以外のものに対しては、他者に会うのが怖かったり、学校に行きたいのに行けないもどかしさ、先生や友人が心配して顔をみにきてくれることにうれしさを感じつつも、素直になれず、うっとおしいと敬遠しがちな態度をとってしまったりする。また、学校にいる時間帯に街をうろうろしていることで、まわりの人からの視線が痛い、と感じ、1日中家で一人過ごしているというようなことが多い。不登校になると、まわりの視線も気になることが多く、他者が思っている以上に相手の自分に対する評価を気にしてしまうように思える。

私なりに不登校時の子どもの心理を推測すると、普段の時よりも神経が鋭敏になり、それが驚くほどもろい。他者からのささいな言葉でもそれに固執してしまい、「どうせ、自分は・・・・・」と後ろ向きに物事をとらえてしまう。

一方で、不登校になったことをポジティブにみている人は、自分ひとりでいる方が気が楽であると感じたり、家にいる方が元気になったり、ととらえる。反抗期で “ツッパリ・不良” の人は、学校よりも外で遊んでいる方が楽しかった、特に不登校については何も考えなかった。考えることが面倒、と答える人が多かった。

結論として、不登校時の子どもの心理は、ネガティブな思考だけではなく、ポジティブな思考も少数において存在することがわかった。自分を追い込んでしまうタイプと自分ひとりの時間の方が楽しい、学校なんてつまらないから遊んでいた方がいい、という楽観的タイプだ。どちらかというと、不登校をしているのは、何らかの問題を抱えている子どもが多いので、心理としては自分を追い込んでしまうネガティブな思考の子どもが多い。

第3章　学校　VS　民間フリースクール

子どもには教育を受ける権利がある。ひと昔前までは、教育を受ける場所といったら学校であるのが当たり前のことであった。しかし最近では、学校以外の機関でも教育を受けられるようになってきている。例えば、適応指導教室や民間のフリースクール、学習塾、通信講座などがある。

主に、適応指導教室やフリースクールは、不登校や問題を抱える子どもたちに対する教育を施す。学習塾や通信講座は、学校に通学していて、さらに勉強がわかるように、とプラスαで通っていたり、受講していたりすることが多い。

適応指導教室は、学校に行けないがそこに通学すると、学校への出席扱いとなる。先生は、公立学校を退職した校長先生や教諭であったりする。フリースクールは、民間団体であるので、独自のやり方で子どもたちに教育を施す。スタッフは、自分自身も不登校の経験があり、フリースクールにかつて通っていて、そのままスタッフとして雇われた、ということも多い。

次節からは、学校と民間フリースクールのメリット・デメリットに焦点をあててそれらについて考えていく。

第１節　学校のメリット・デメリット

学校、それは生きる知恵や集団生活に適応していく力を身につけていくところだ。日本の場合、小学校・中学校の９年間は義務教育課程にあたり、教科書は無償で与えられる。授業料もタダで、利益を考えないので、教育を受ける側としてはうれしいことである。以下からは、社会にとっての学校のメリット・デメリットを箇条書きにして挙げていくことにする。つまり、学校の果たしている機能面からの考察である。

メリット

- 国の政策で定められた法的な教育を施している。
- 様々な子どもがいて、交流の輪が広がる。
- １日の流れが決まっていて、規則正しい生活を送ることができる。
- 生きるために必要な基礎知識を学ぶことができる。
- 学芸会や合唱コンクール、運動会など様々な行事があり、みんなで一致団結することの大切さや成功したときの喜びを感じることができる。
- 集団教育であるため、一人当たりの教育費が安くなる。
- 校庭やグラウンドがあることで、おもいきり体を動かすことができたり、様々な遊び道具に触れたりすることができる。
- 理科で実験を試みるなど、実技系科目では普段ではできないようなことができる。

・ 子どもの栄養を考えた給食がある。

デメリット

・ 画一的な教育の仕方になりがちである。
・ 詰め込み教育で、どんどん習う内容が増えていき、勉強の分からない子にとっては1度つまずくと、立ち直ることができないこともある。
・ 教師は忙しすぎて、子どもにあまり関わる時間がとれない。
・ いじめなどが起こっていても、大人は気づかなかったり、ちゃんと取り合ってくれることがなかったりする。
・ 学校側は、いじめや事件が起こると、内容を隠蔽しようとすることがある。
・ 何気ない教師の一言で、子どもの今後を左右することがある。
・ 教師の中には、わいせつ行為や生徒をえこひいきする人がいる。
・ 中学校は小学校よりも、テストに部活に忙しく、それらについていけない子どももいる。
・ 中1ギャップ(英語や数学急に難しく感じる)により、勉強に意欲がわかなくなる子どももいる。
・ モンスターペアレントの出現。

以上が私の考える学校のメリット・デメリットであるが、不登校児からみた学校はいったいどのようなものなのであろうか。私が考えるデメリットと合致するような意見もなかにはある。今回もまた、森田洋司の『不登校-その後-』の中でのインタビューより、「学校とは何か」の質問に対しての子どもの答えを抜き出してみる。

不登校児からみた学校とは・・・

(Eさん)

教科書を読むだけの授業ではなく、もっと楽しい授業であればと思う。先生の中には、わかりにくい授業や、教科書のままという人もいる。勉強のできる人はいいが、そうでない人は勉強したくなくなってしまう。私は中3で全然勉強についていけなくなった。

本当なら友達をつくったり、勉強したりするところ。私にとってはつらいところでしかなかった。人の痛みが分からない人がいっぱいいて、平気でいろんな言葉を使ったりする。

(Fさん)

勉強する場所ということかな。でも、塾の方がわかりやすかった。社会に向かって前向きな話をしてほしかった。難しいことだけれど、子どもの気持ちをわかってほしい。自分たちのことをちゃんと見ていてほしい。

社会に出てわかったことだけど、勉強は大切だと思う。戻れるなら学校に戻った方がよい。でも、無理はよくない。人にもよる。

(Gさん)

学校は勉強が大切だと思うけれど、心を育てること、団体生活だけど個人のよいところを伸ばすことをしてほしい。先生と生徒の信頼が大切(言葉の暴力で傷つく)。一人の力でなく、みんなで協力して一つのものを創りあげていく大切さを教えて欲しい。生き物の大切さ(生命・自然・季節の違いなど)ものの見方がそれぞれ違うということの大切さを教えて欲しい。学業中心の社会では世の中はよくないと思う。視野が狭くなる。

学校へ行くか行かないかはその子の意志だと思う。それは本人が決めること。強制はよくない。それよりも自信をもたせることのほうが大切。

(Hさん)

生徒一人ひとりの個性を引き出し、伸ばす場(学校のメンツから、勉強第一主義で、個々の生徒の持ち味を引き出してくれなかった)。成績とか外見(服装)で見ないで欲しい。生徒の意見も反映した校則であって欲しい。

不登校の子を戻すことについては、条件つき賛成。頑張って自分の中で戦えば、行けるはず。強制されたり、押さえつけられたりすると行きたくなくなるので、「来たいときに来いよ」という待ちの姿勢が重要。そうすれば戻りやすくなる。

(Iさん)

適応性を試すところ。選択の多様性が必要(画一的な教育ではないといったいろいろな意味合いが含まれている様子)。 合わない学校に居続けるのはつらいので、気楽に中学校を移れるシステムにしてほしい。

他のインタビュー調査の様子からも、「学校とは?」という質問に多くの人が "勉強する場" と答えていた(森田 2003)。不登校になった原因は、いじめなど多種多様によるものであるが、その他には、勉強する価値がわからなかった、ということも多かった。小学校から中学校に上がるときに、急に勉強する内容が難しくなったと感じるようだ。

また、人間関係の構築の仕方がわからなく、友達が思うようにつくれない。先生が生徒を見た目などで判断し、自分の個性を認めてくれない、と感じる人も多くいた。そこから、人と接するのが怖くなり、そのような人々が集団で生活する学校という場も怖れてしまうのだ。そして、不登校になる。

では、子どもが学校でうまくいかないと感じる時、子ども・まわりの大人たちはいったいどのようにしたらよいのだろうか。

方法としては3つ考えられる。1 つ目が、学校の中身を変えていく。2 つ目が、子ども自体が心理カウンセリングなどを受けて、徐々に学校に適応していけるような心身をつくっていく。3 つ目がフリースクールに行くことだ。では、最初に学校を変えることとして、どのようにすればよいかを考えていくことにする。

学校を変えていくことの中で、提案することが7つある。これから挙げることは、ある学校においては行っているところもあるだろう。1つが、魅力ある学校・学級づくりをめざすことである。これはよく言われていることだが、アンケートをもとに子どもの学校や学級に対する評価を知る。また、体験活動を通して子どもの知的好奇心を湧かせる。授業もいつも同じようなパターンで進めるのではなく、時々は新鮮味を帯びた授業を考えるようにする。

2 つ目が校内指導体制の確立である。校内指導とは、子ども同士のトラブルが起こったときに教師がどのような対処をするか、や子どもの生活指導などである。特に小学校はまだ何もわからない、ということが多いので様々なことを教師は教えていく必要がある。

3 つ目が新たな課題等への対応である。昨今の教育問題として、ADHD や事件・事故、いじめ問題などがある。それに対しては、障害のある子どもとの関わり方について、やいじめから被害者を絶対に守ることなど教師として当然の行動を身につけておくようにする。

4 つ目が、教師の研修の充実と啓発活動である。不登校に対する研修がそんなに多くはないため、不登校への理解が不足している教師もいる。これからの教師の研修に不登校についての内容を今までよりも増やしていくようにする。

5 つ目が、教育相談の充実である。子どもが悩んでいるときに、気兼ねなく立ち寄れるような教育相談を開設する。ボランティアの人、学校とは無関係な人でも話は聞くことができる。この関係は、「ナナメの関係」とも言われている。タテの教師―生徒や先輩―後輩の関係でもなく、ヨコの同学年の関係でもない。第三者的な関係。そんなナナメの関係の人でも話は聞くことができる。

6 つ目が、再登校支援の充実である。教室に入れなくても、保健室や職員室に顔を出して帰ってもそれを登校扱いにして、不登校に寛容になる。

最後が、関係機関との連携である。児童相談所や民間施設との密接なつながりを持つ。不登校は先生 1 人の力で解決するのは、余程の力がある人でない限り難しい。自分のクラスに不登校の子どもがいる場合、自分ひとりで何とかしようとするのではなく、様々な人と関わり合いながら、網の目の関係でよい方向にもっていくようにする。

次の方法としては、子どもに対する心理カウンセリングである。これは、心理学を学んでいるカウンセラーや医師によって、学校の体制に適応していけるような子どもに矯正していく。カウンセリングの仕方は、様々な種類があり、箱庭療法であったり、遊戯療法であったり・・・・・とその子どもに適した療法を施していく。この場合、専門家は長い目で子どもを見守っていく必要があり、矯正を施していくのに多くの時間がかかる。そして、親に対してカウンセリング代など多くの費用がかかることも確かである。

最後の方法は、次節で紹介するフリースクールへ行くことである。人にはそれぞれ自分らしく生きる権利がある。それを無理に学校に登校するように、と強制していくことは必要ないはずだ。自分の居場所がそこで見つけられるのならば、それはそれでいいのではないだろうか。1 番の目標は、大人になって社会に出て行けるかどうかだと思う。フリースクールで自分と同じ立場の人がいることで共感することができ、自分に自信を持つことが重要となってくる。

第 2 節　フリースクールとは

本節では、フリースクールについて詳しくみていく。よっては、貴戸理恵著『不登校は終わらない』(2006)の引用をまじえながらの説明を行うとする。不登校の子どもを対象とした、既存の学校とは異なる機関、施設が、フリースクールと総称されている。フリースクールの規模や活動内容はきわめて多様であって、民家やマンション、事務所ビルの一室を借り、スタッフや子供を合わせても 10 人に満たないような小さなものから、在籍数が 100 人を超える大きなものまであり、一般の学習塾が不登校の子供を受け入れてフリースクールと称している例もある。

教育(活動)内容は、子供の自主性を重んじ、スタッフと子供が対等な立場で民主的に活動内容を決定するものが主流だが、既存の学校のようなカリキュラムを持ち、スタッフ(教師)が主体となって、「規則正しい生活」や学習をさせる施設もある。

ほとんどのフリースクールは、学校教育法 1 条に定める学校の要件に該当せず、私立学校設立のハードルがきわめて高いこともあって、正規の学校としての認可を受けていない。このため、フリースクールを卒業・修了しても、進学や就職、資格取得に必要な学校の卒業資格は得られない(義務教育の小中学校に関しては、学校長が認定すれば、出席日数に関わらず進級・卒業できる)。しかし、学習指導要領等の規制の枠にとらわれず、既存の学校にはない、自由で独創的な教育を実現することができるため、既存の学校に合わない子供にとって、重要な選択肢となっている。また、1992 年から、在籍する学校の校長の裁量によって、フリースクール等の民間施設に通った期間を、学習指導要録上出席扱いすることができるようになった。

フリースクールの対象年齢は、当初、小中学生の学齢期の子どもが中心であったが、しだいに高校生以上の年齢にも拡大され、さらに、フリースクールの精神による大学として、東京シューレを母体に 20～30 代の若者たちが作るシューレ大学が 1999 年に設立された。

フリースクールの経営主体は、個人または零細な非営利団体がほとんどで、一部に NPO 法人がある。ごく一部の例外を除いて、国や地方公共団体からの公的な支援を受けることができないため、ほとんどが財政的にきわめて困難な状況にあり、一般の学校に比較して、保護者の金銭的負担は重くなる傾向にある。個人が私財を投げ打って設立・運営しているところも多く、ほとんどのスタッフがボランティアで占められ、子供からの学習ニーズに十分応えられなかったり、財政難やスタッフ不足から、突然閉鎖されてしまったりするなど、多くの困難を抱えている。小中学生については、義務

教育を補完する役割を果たしており、国や地方公共団体からの公的支援が求められている。

この論文においては、フリースクールの定義を「不登校の子どもを対象とした、既存の学校とは異なる機関、施設」とすることにする。以下から、実際日本にある様々なフリースクールを紹介する。以下の４つのフリースクールを選んだ理由は、日本の主要都市のフリースクールを選び、それぞれの地域ごとでその特色が出るかもしれない、と考えたからである。

団体名	東京シューレ（東京）	だいと（宮城県）	フォロ（大阪府）	玄海（福岡県）
設立年	1985 年	2008 年	2001 年	1998 年
目的	不登校の子ども及び不登校を経験した子どもと、学校外の学び・交流を求める若者の成長と生活の権利を保障・拡大し、子ども主体の教育のあり方を創造・発展させること。	小・中学校における不登校・学習向上への対応をおこない、在籍学校との連携を図り、復学支援強化・保護者支援強化をする。	学校に行かないからといって否定されることなく、子どもたちが自由に、自分たちが中心となって創っていく場。多くの人が集い、交流し、さまざまなものを創造していく。	「人生は美しく、意味がある」ことを家に閉じこもっている子ども達に教える。 卒業する頃には、自信と自立が促され、一人の人間として立派に成長し、元気で活発な子どもに成長していくようにする。
内容	いつ来て、いつまでいるかは本人が決める。自分がしたいことを自分で決めて、過ごし方は人それぞれである。講座やイベントなど設定していて、参加したいときは参加できる。	LDやADHDの児童・生徒への指導をおこなう。 また、学習ばかりではなく、体験学習やソーシャルスキルトレーニング等を使った教育も生徒の発達段階・不登校段階に応じて展開している。	すべてにおいて、子ども自身が決めることを大切にしている。あくまで子どもひとりひとりが、自分の感覚で判断して納得して、つながりあっていくようにする。	全寮制において、皆と一緒に勉強したり、歌を唄ったり、掃除をしたり食べたりする事を心と体で体験する事で生きる事の喜びを味わう。 家族と一緒に新たな可能性と個性、一人の人間として自立した子どもに成長していくように常に考え、活動する。

年齢	小学生～18歳	小学生・中学生	小学生～	中学生・高校生・一般

分類してみると、地域ごとの特色はそんなに目につくことはなかった。

設立年も1985年が一番早く、その後90年代から2000年代にかけて各地でフリースクールがつくられる動きが広まった。

それぞれのフリースクールによって、理念や指導内容などが大きく異なることもあり、一口にフリースクールと言っても、活動や考え方が自分にあったフリースクールを探さなければいけないと感じた。

内容としては、自分でやりたいことを決めていく、という考え方のものから軍隊のように1日の流れが決まっていて、共同生活などを基本とするものまであるようだ。

第3節　フリースクールのメリット・デメリット

最初のフリースクールは、1985年頃に学校以外にも子供が自由に行き、様々な人と出会い、何かを学んだり、活動したりするところがあれば、という願いが込められて設立されたものである。そのさきがけが、「東京シューレ」である。この団体は、不登校の子を持つ奥地圭子さんが、1983年頃から呼びかけを始め、そのときに所属していた「登校拒否を考える会」を母体にして活動を始めた。

フリースクールは民間の会社であるので、学校や適応指導教室などの公立機関と違い、お金がかかる。それは、もちろん子どもの親が負担することになる。学校以外にも、フリースクールのほか、適応指導教室や児童相談所、教育センターなど様々な教育機関が存在する。

この本節では、その中でも、フリースクールに焦点をあててメリット・デメリットを考えていくことにする。

メリット

- 自分の生活に合わせて、通うことができる。
- 同じ悩みを持つ仲間がいて、安心感がある。
- 学校に戻すことを考えているのではなく、子どもが自分の居場所を感じられるようにするのが目標であるので、子どもにプレッシャーを与えることは少ない。
- スタッフが不登校経験者や不登校に理解のある人が多い。
- カウンセリングなどが充実していて、親も相談がしやすい。
- 子どものやりたいことを優先し、自分らしく生きることを優先している。

・ イベントが多く、楽しみやすい環境にある。
・ 幅広い年代層が集まり、交流できる。
・ 高卒認定試験やその他の資格も取得できる。
・ 学校ほど規則やきまりが多くはないので、自分らしく振舞える。

デメリット

・ 公的な支援がほとんどないので、親の金銭的負担は大きい。
・ スタッフがほとんどボランティアであったりするので、人員不足になる。
・ 財政難で、突然閉鎖することもある。
・ 居場所がフリースクールだけに限られてしまい、関係が狭まる。
・ 大人になる時、社会的自立の面で上手くいかない人も少なからずいる。
・ 学校教育ほど団結力を養えない。
・ 独自の教育方針により、内容が体罰的なものもあり、法に触れることもある。
・ 学習面の理解が不十分で卒業することがある。
・ 地方に住んでいる場合、距離が遠く、通学が大変な面もある。
・ 時間が午後からや数時間だけであったりするので、卒業した後の環境の変化に悩むことがある。

以上、私が考えるフリースクールのメリット・デメリットである。フリースクールは、学校ほど規則やルールが徹底していないので、子どもからみると居心地がよいと感じられると思う。子どもたちの中には、小学校と中学校のギャップ（急に勉強が難しくなる、部活・先輩後輩関係）に適応できずにそのまま不登校になる、という子がいる。そのような環境の変化に対応するために、無理して心身が弱くなるまで学校に行くのではなく、フリースクールで自分が生きやすいように過ごすことができるのは子どもにとってとてもよいことではないだろうか。

私は、人間は人生において一度はつまずいたり、悩んだりする時が必ずある、と考えている。不登校になった子どもや様々なことに悩んでいる子どもは、その時期が他の人より早かったのだと思う。そのことを肯定してあたたかく受け入れる考えのフリースクールは必要不可欠な存在である。

人は誰でも、自分の居場所を求める。多くは自分の所属するところにある。学校・家庭・クラブ・アルバイト先など気の置けない仲間がいて、その人たちに素の自分をみせることで安心感を抱く。そのような居場所が学校では、いじめを受けて、家庭では両親が喧嘩をしている、などでは本当の自分ではなくなり、不安定になるだろう。

フリースクールでは、自分の好きなことができる。例えば、ピアノやギターの練習、絵描き、読書、スポーツ、勉強・・・・・学校教育のように、強制して勉強したり部活をしたりすることはない。そ

のような自由であることも人によっては必要なことだ。

一方、デメリットとして、1 番の問題は「学ぶ機会」がなくなっていることだと思う。「学ぶ」ことは、子ども時代の特権でもあり、生きる知恵ともなりうるものだ。それが、不登校により多くの子どもたちの学ぶ機会が減り、大人になった後に不利になることがある。そのような後の人生に大きく関わることで、子どもたちの将来が限定されるようになってしまうのは悲しいことだ。学校のように広い交友関係が結べず、フリースクールを卒業した後にそのギャップに苦しむことがある。このように、多くの子どもたちは自分で選んだ道であるが、その後の人生に立った時どうしたらいいのか、再び悩むこともある。

また、金銭面や財政面の問題もある。親の金銭負担は大きくなるし、財政面も民間で行っているので経営していくのもそう簡単なことではない。

第 4 節　大人たちの対応

学校・フリースクールともに良いところ・悪いところがある訳だが、これからの子どもたちがのびのび自分らしく生きやすい社会にしていくためには、どのようにしていけばよいだろうか。本節では、自分なりに論じていくことにする。

今の学校教育は、昔とは違い、体罰の禁止・個人秘密の管理・ジェンダーフリーなど時代の変化に合わせての子どもへの対応が要求されている。具体的には、子どもへの暴力（言葉も含む）の禁止・個人の成績や家族構成の秘密主義・男女ともに“～さん”付を行うなどである。そのように、時代の変化に合わせた教育の仕方はこれからも必要不可欠なことである。これらは、理にかなった現代教育の体制である。

あと、子どもたちがのびのび生きやすい社会にしていくためには、教育問題でもある教員数の増員をすすめることである。教師は、日常の雑務が多過ぎて、子どもの様子をじっくり観察する時間がほとんどない。昼休みに子どもたちといっしょに外で遊ぶことで、教室では見せない表情や態度を見ることができる。そういった時間の余裕を保持するためにも、クラスの人数を 30 人以下にするなど、少人数教育を推進する。教師の仕事を今までよりも減らしていけば、教師にも心の余裕が生まれるのではないか。自治体のあるところでは、教員数の増員を試みているところもある。日本中で教員数増員の傾向が強まれば、不登校になる前にいじめに気付き、撲滅したり、子どもの悩みなどに気付いて助けたりすることができると思う。

小学校から中学校にあがる時に起こる中1ギャップもある。これは急に勉強内容が難しく感じ、勉強嫌いになるものだ。特に数学や英語に多い。英語は、小学校から外国語活動として徐々に取り上げられてきている。そのため、中学校からいきなり外国語を習い始め、違和感がやわらぐので、勉強嫌いで学校が嫌になる、というのは以前よりはよくなってきているのではないか。数学は、突然

内容が難しくなるので、まずは小学校での基礎（特に、掛け算の暗唱や速さに関する公式）を理解させることを徹底する。大人になっても掛け算や分数が分らない、という人が結構多くいる。そして、教科書通りの授業を進めるのではなく、たまにはゲームを使った授業、道具を使った授業を行い、授業に新鮮味を出していく。どんな授業にも共通することだが、教師からの一方向の授業では子どもは飽きる。教師・子ども双方向で言葉のキャッチボールがあるような授業であれば、子どもも授業に参加しているのだ、という意欲が湧いてくるのではないだろうか。

フリースクールは、一部では制限つきのところもあるが、子どもの自由を一番に考えていることが多いようだ。学校生活においては、毎日時間割が決められていて、宿題を与えられてそれを授業で点検・・・というスタイルである。そのような毎日の繰り返しに子どもたちの中には、嫌気がさしていたり、ストレス・疲労感を感じたりして学校に行くのが精いっぱい、という風に思っている子もいる。

フリースクールの活動内容は、多くの場合自分で決めることができる。絵を描いたり、楽器を演奏したり、読書、勉強・・・・同じ空間でそれぞれの子どもが様々な活動をしている。自分自身で決断する、という力は、学校にいる間はあまり身につけられないと思う。それをフリースクールにいる間にほとんどの子は身につけていく。自分で決めるのは、大人になってから様々な場面で必要になってくることなので、小さい時からそれを実践していけるのはフリースクールならではの特権だ。

一方では、自分の好きなことができるが、勉強が遅れていくのも確かだ。勉強が嫌になったのが理由で、学校に行けなくなった子どもは、おそらく勉強にしばらくは手をつけなくなってしまう。そのまま勉強せずに生きていこうとすると、大人になってから基本的なことが理解していなくて苦労することがある。その抜け落ちた知識は、大人になって人前に出た時に、隠すことを押し通すか、知識がないことをオープンにするかのどちらかになる。やはり、ある程度の知識は年齢に応じて習得していくことがこれからを生きていくうえでも必要になっていくのではないだろうか。

私が提案するのは、自分の好きなようにして、1 日をフリースクール内で過ごすのではなく、1 日のうち短い時間でもいいので、学習の時間を充てることである。多くの子どもがいると自分に劣等感を感じてしまうという子どもには、能力に合わせて習熟度別のコースや個人学習を考える。私は、勉強が嫌いだった人も、大人になれば勉強する機会がなくなり、あの時勉強しておけばよかった・・・という気持ちが強くなると聞いたことがある。フリースクールでは、基本的に子どもの自由が 1 番に挙げられている。私は、子どもの自由を認め、保障することも大切だが、何か強制（子どものことを考えての意味で）することを作って、それに子どもが参加する、ということも必要と感じている。なぜなら、フリースクールを卒業した後の将来には、仕事や家庭生活などの場面でそういった強制せざるをえない状況が待っているからだ。仕事であれば、始業時間前には、自分の仕事場に必ず着いているようにして、終業時間までに自分の任務を終わらせるという拘束（＝強制）もある。家庭生活では、自分の立場としての役割が存在する。

したがって、勉強するのは個人の自由とするフリースクールの考え方を、1 日に 1 回は一人ひとり勉強する時間を作る、という考え方にシフトしていければよい。

あとは、フリースクールも学校と同じように国の援助を受けられるようにする。欧米では、日本のような学校に行けない子どもたちがフリースクールに行くのだ、という考えではなく、学校と同等な立場でフリースクールが考えられている。日本の場合、大概の人は、フリースクールはネガティブな要素が含まれているように感じている。しかし、欧米ではポジティブに考えられている。これからは、学校の反対側がフリースクール、という考え方ではなく、フリースクールも子どもの教育の一部分である、という肯定の認識に変化していけばよい。

また、欧米にはオルタナティブ教育やホームエデュケーションが普及されている。オルタナティブ教育は、新しい教育運営・進級制度、教育科目などを指す。保守的な学校制度に対抗しての時代に合わせた教育の仕方と考えられる。ほとんどが私立の学校であるが、一部の学校では国からの援助を受けていたりもする。日本の場合、オルタナティブ教育は、フリースクールや不登校児へのサポート校があてはまる。ホームエデュケーションは、家庭教育を指す。日本でも、それぞれの家庭のやり方で、子どもを教育していければよいのではないだろうか。子どもは、みんながみんな同じ考えではないので、選択する権利があることで、今までの画一的教育が個性をひきのばす教育に変わっていけると私は信じている。

では、もし、自分の近くに不登校の子どもがいる時、または、わが子が不登校になった時に大人たちはどのような対応をしていけばよいのか。

まずは、家庭から考えていく。わが子が突然、「学校に行きたくない」と言い始めたら、親からしてみると「ズル休みかな」と思ってしまうだろう。今まで、普段通りに生活していたわが子が突然何を考えているのか、という気持ちだ。まず親としては、最初に何で学校に行きたくないのかを聞いてみる。いじめや劣等感からくるものは、核心を話す子どもはそんなに多くはない。何かしらの理由を作り、オブラートに包む。親は、それを察してあげることだ。子どもが「学校休む」と言ったことに対して、理由も聞かずに「いいわよ」と承諾してしまえば、甘えが次第にエスカレートし、学校に本当に行きづらくなってしまうこともある。親は、子どもの普段の様子を傍で観察しながら、ふと見せる表情が暗いな、と感じ取ったり、いつもよりご飯を食べてないな、など微妙な変化から心の様子を汲みとっていったりするようにする。

そして、その休みが学校への嫌悪感から来るものであれば、無理に登校強制させない。子どもは、登校することに対して限界を感じているかもしれないからだ。子どものことを詮索するのではなく、まずは学校との連絡を密にする。家では、子どもに「私はあなたの味方だから、安心して」という思いを伝える。言葉をかけなくても、ただ一緒にいるだけでもその想いは伝わるであろう。

次に、不登校がそれ以降も続く様子であれば、親はこれからの子どもと向き合っていく時間が今までよりも長くなる、と考えていた方がよいだろう。早く学校に登校してほしい、というのが本当の願いではあるが、そう簡単にはうまくいかない。子どもは誰とも会いたくない、という気持ちで一人部屋に閉じこもってしまうこともあるだろうし、暴れてしまうこともあるかもしれない。人は、人生のうち一回は挫折を経験したり、悩んだりするものだ。その時期が早かった、という風に解釈して見守っていく。

子どもが学校に行かなかったら、親は精神病かと思い、病院に連れて行ったり、フリースクールや適応指導教室を勧めたりすることもあるだろう。そのような時は、子どもを急かさずに、落ち着いた時期を見はからって社会に参加させていく。子どもからしてみると、まだ心の準備ができていないこともあるからだ。

最終的には、外の社会に参加できるようになることが目標である。家庭以外に自分の居場所があるようになることが本人にとっても安心できることだ。私は、人はよほど強くない限り、一人では生きて行けないと思う。しだいに大人になるにつれて、自分にとって居心地のよい場所を求めるだろう。

今度は、視点を変えて、教師の側からみての子どもへの対応を考えてみる。今まで、様々な不登校に関する事例をみてきたが、不登校になった子どもからみた教師の存在は、(親身になって相談に応じてくれた/勉強がわからなかったが、家に来て教えてくれた/時々、家庭訪問に来て、顔を見に来てくれた)か(登校するように、しつこく電話や家庭訪問をされた/何も私に関心を示してくれなかった/都合のいい時に呼び出して、自分にとっては嫌だった)などの教師に対してよいイメージと悪いイメージに分かれた。

教師は、もし、自分のクラスに不登校の子どもがいるのならば、「何で学校に来ないの？何かあったなら先生に話してごらん」と原因をすぐに追及しないようにする。子どもからしてみると、「もう限界で辛くてしんどかったのに、先生は何も気づいてくれていないのだ」である。子どもは、とても傷つきやすく、繊細になっているだろうから、言葉かけひとつも選んでいかなければならない。

学校に休む由の電話がかかってきて、休む理由が風邪や病気以外で「ん？なんだか変だぞ」と教師が思えば、「○○さん、どうしたの？今度時間を作って、先生と話そうよ」と言葉をかける。教師は、子どもが不登校になる前に何か様子や表情の変化に気づきたいものだが、人の心はそう簡単にわかるものではないので、不登校が始まったときは広い心で接していけるようにする。教師やほかの人からみると、小さな悩みであるかもしれないが、本人にとっては、本当に苦しい悩みなのである。「何だ、そんな悩みか」で事を終わらそうとするのではなく、子どもと一緒に懸命になって問題に向き合っていきたいものだ。

保健室登校になった子どもに対しては、様子を見に行ってコミュニケーションをとる。自宅から外に出られない子どもに対しては、電話や訪問で、今どのような様子なのかをみる。自分が担任する子どもであるので、最後まで責任を持って見守っていく。クラスのなかのよい子どもにプリントを届けに行ってもらったりして、クラスとの関係を繋げていたいものだ。時々、教室に入る子どもに対しては、本人としては居づらいけど、頑張ろう、と思っている。それを教師は後押しをして、周りの子どもに温かく迎えてあげることなどを指導していく。事例によると、頑張って教室に入ったのに、周りの子どもが、「何で来たの？」というような目で不思議がられて、また結局不登校になってしまった、ということがあった。教師は、不登校の子どもだけでなく、ほかの周りの子どもに対しても接し方を指導していくことが大切だ。

進路の話や今後について話し合うときは、子どものことを一番に考える。自分がどうしたいのかを子どもに聞く。無理やり、「こんな学校があるから、受験してみなさい」と押し付けるのではなく、「先

生は、あなたに合った学校を調べる。あなたはどうしたいのか考えておいて。何か相談したいことがあれば、いつでも言って」と子ども主体で考えていく。

第５節　子どもたちのその後

不登校になった子どもたちは、その後どのように人生を歩んでいくのだろうか。事例からどのように生きていくのかをみていく。

・ 新聞配達のアルバイト
・ 単位制の高校→すぐにやめる
・ 通信制の高校→短大→保育所の臨時採用
・ 大検予備校→大学進学
・ 専門学校に進学→大検予備校→進学断念
・ 市場や町工場で働く
・ 大工職につく
・ ディスカウントショップの従業員→スーパーのレジ係→結婚・出産→離婚→水商売
・ 公立高校卒業→短大進学→フリーター
・ フリースクール→世界を旅行→フランスに語学留学→旅行会社営業マン
・ フリースクール→ＮＰＯ職員
・通信高校→大学→大学院→臨床心理士

（不登校―その後、不登校は終わらないより抜粋）

上記の子どもたちのその後は、ほんの一部であり、ほかの人生もたくさんある。不登校になり、学校を卒業した後は先生や親に薦められて自分のレベルにあった進路に進む。それは、たとえ自分が納得しなくてもいやいや進むのだが、途中で友人と気が合わない、や学校の方針についていけないなどの理由で中退するのが多いようだ。そして、また家で一人考える時間が増える。

一方、中卒で就職をした子どもは、大工職やお店のレジ係など様々な職種を転々としながら暮らしていく傾向がある。すぐに就職をした人たちは、「自分は中卒なのだから、人より仕事を早く覚えて、一人前になるのだ」という思いが強いようだ。学歴にコンプレックスを持つが、それを「何くそ。負けてたまるか」と思い、大人になってからは高卒や大卒の人たちと同じように働いている人もいる。

フリースクールに通い始めた人は、そこで気の合う友人を見つけて、自分の居場所をつくる。同じような理由で、学校に行けない人たちが集まるから、話をしなくても自然と気持ちは繋がる、と感じているようだ。普段は、話しづらいこともそこでは気の向くまま話すことができる。そして、学校に行くように、毎日フリースクールに通い始める。その後は、それぞれの進路は様々であるが、そのままフリースクールのスタッフ、販売のアルバイト、大学進学など自分の志望に合わせて決めていく。

本当のところ、不登校になった子どもは、多くが学校に行きたかった、と思っている。けれども、何かしらのつまずきがあって、学校を諦める。最初から学校に行かなくてよかった、と思う人もいるが、それは少数で自分の生き方に自信がある人だと思う。

不登校になった原因は、大人になった今でもよくわからない、という人がいる。私の考えは、それは学校生活の様々な場面で、自分にとって辛いことがあったのだろう、である。友人・先生との会話のやりとりや学校の方針、勉強……自分はそれらに知らず知らずの間に疲れていたのではないだろうか。不登校になった原因がわからない、というのは、決しておかしいことでも何でもない。ただ、つまずく時期が人より早かった、というのが私の考えである。

おわりに

今回の卒業論文を終えて感じたことは、不登校のゴールは学校復帰ではない、ということだ。私が中学校の時、自分のクラスに不登校の友人がいたのだが、「早く元気になって、クラスに戻ってきて」と手紙などを送っていた。今思うと、そう簡単な問題ではなかったのだ。私が思っているほど、問題は簡単に解決するのではなく、本人にとっては、立ち直るまでには多くの時間がかかると感じていたのだろう。その友人は、二十歳の夏に地元で開催された成人式の時に会ったのだが、以前のように元気な様子であった。

人は誰でも、人生のうちに悩んでへこむ時がある。人間関係・学校生活・勉強などその時代によって何かしらあるだろう。その悩みが深ければ深いほど、立ち上がることが難しくなるし、考える時間もいつもより増える。不登校もその自分を客観的に見つめなおす時期なのだ。まわりの人は、身近にいる子どもが不登校になった時に、慌ててあの手この手で学校に登校させようとするのではなく、長い目で元気になるまで見守っていきたいものだ。本人が一人部屋に閉じこもっていたいのなら、そのように好きなようにさせる。暴れてしまい、手がかかるようでも、毎日一言は声をかけ、あきらめないで向き合うこと。きっとその思いは子どもに伝わるだろう。

これからは、学校第一主義ではなく、フリースクールやホームエデュケーションにも光が当たる世の中になればよい。学校に行かないと、将来に支障がある、という考えではなく、フリースクールでもホームエデュケーションでも自分次第でどうにでもなる、というように。実際、欧米では家庭によって教育が異なり、学校に行っていないと言っても珍しいことではないのだ。これからの日本は、フリースクールやホームエデュケーションをネガティブなものとみなすのではなく、学校と同等の立場としてみていけるようにする。そのためには、国がそれらに援助をしていけるようになることが一番大切なのではないだろうか。人それぞれ、生き方は違う。子どもが生きやすい世の中だ、と思えるような社会になることを願う。

参考文献

文部科学省ＨＰ
http://www.mext.go.jp/

東京シューレ
http://www.shure.or.jp/

木村登校拒否相談室
http://www.geocities.jp/wwnmf843/school/futoko_monbushou.html

「不登校」「ひきこもり」「高校中退」関係の情報提供ページ　あしたいいことあるかな
http://iikoto.thyme.jp/index.htm

貴戸理恵『不登校は終わらない』新潮社２００４年

森田洋司『不登校―その後』教育開発研究所２００３年

齊藤万比古『不登校の児童・思春期精神医学』金剛出版２００６年

井出草平『ひきこもりの社会学』世界思想社２００７年